

長谷川慶太郎著「世界大激変一次なる経済基調が定まった！」東洋経済新報社 2016年8月11日刊を読む(1)

1. 世界的デフレの流れは避けられない

- (1) この先、世界経済の基調が「デフレ」で推移していくことは疑いない。むしろ、**世界経済はこれまで以上に急激に「物価下落＝価格破壊」の波に襲われる**かもしれない。
- (2) 日本や欧州の例で明らかなように、どんなに金融を緩和してもマイナス金利を導入しても、インフレにはならない。国家として打てる手立てをすべて使って、インフレへの転換をはかろうとしてもデフレが進行してしまうのはなぜか。くり返しになるが、最大の理由は、もはや**国家総力戦のような大戦争が起こらない**からである。
- (3) 著者が一貫して述べているように、現在の覇権国家であるアメリカは、過去の歴史上、類を見ないほど、圧倒的な軍事的優位を築いている。おそらくは、アメリカ以外の国家が束になってかかっても、アメリカの本土に足を踏み入れることは不可能なほど、その力は突出している。したがって、もはや先の大戦のような国家総力戦は起こるはずがない。
- (4) では、経済学の理論というものは何だったのか。古典的な貨幣数量説などに則れば、間違いなく**金融緩和でインフレは進行する**はずである。それは経済学のほうが、インフレ前提の理論だったのだ。**戦争があるという前提で経済学の理論がつくられた**と考えるべきである。
- (5) 経済学者たちがみな心配しているのは、「国債を増発していった結果、物価がどんどん上がっていき、ある時点になると一転して今までのデフレ状況から一気に国の通貨に対する信頼がなくなってしまう、ある日突然歯止めのきかないハイパーインフレになるのではないか、」ということである。
- (6) 著者は「そんなことは起こり得ない」と断言しよう。なぜなら、そのときのバックになる商品の需給バランスはどうか。需給バランスは、世界的に供給過剰である。それでなぜ物価が上がるのか。上がるわけがない。
- (7) 大戦争にともなう巨大な消費があつて初めて物価は上昇する。アメリカの圧倒的優位の下で大戦争が起こり得ないとなれば、インフレになどなるわけがない。

2. 冷戦終結後、平和と安定の時代へ

- (1) 世界的規模でデフレが進行していくと、世界市場が拡大し、安価で質の高い製品が世界で流通していく。さらには、低金利で資金が得やすいため、巨大プロジェクトへの投資がさかんになる。そのことがまた世界の市場をより密接に結びつけ、ますますデフレの流れを強めることになる。
- (2) デフレ下ではどうしても供給過剰になる。そのため、企業は常に消費者に選ばれる側になる。したがって、企業は消費者に選ばれるために不断の努力をしなければならない。常に経営の効率化、製品の質の向上をはからなければならない。デフレは「個人に天国、企業に地獄」なのである。
- (3) したがって、多くの個人にとって、デフレは「悪」ではない。むしろ、豊かさと生活の質の向上をもたらしてくれる、歓迎すべき経済基調なのだ。このことを著者は、『世界大規模投資の時

代』(東洋経済新報社)で詳しく述べたが、今回、ここでまた、デフレがいかに経済や社会の発展をもたらし、国民を豊かにするかについて述べたい。いくつか重複する点があるが、ご容赦いただきたい。

- (4) 20世紀は「戦争と革命」の時代であった。第一次大戦、第二次大戦、冷戦という3つの大戦を通して、世界の人々は殺戮と破壊の恐怖におびえ、飢餓、物資の欠乏にあえぎ、歴史の悲惨な現実に翻弄された。経済の基調は、物不足、労働力不足であり、したがって経済の基調はインフレで推移した。
- (5) ただ、1991年の冷戦終結をもって、世界は変わった。「平和と安定」の時代が到来したのである。もちろん、局地的な戦争、暴力、テロの恐怖は地上から消えていない。平和維持のための強力な軍事行動は必要であるし、そのための世界各国での協議、努力は欠かせない。
- (6) 「平和と安定」の時代は、さまざまな恩恵を人類にもたらす。自由な経済活動の広がり、これまで^{ひっそく}逼塞していたさまざまな人々を、市場のメインアクターとして引き出すことにもなる。
- (7) 具体的には、山間僻地、大陸の奥地で生存限界のもとで呻吟していた人々にも、安い商品を提供することができるようになったし、安全の確保は、自由な移動をもたらし、経済活動への参加を労働者として、さらに買い手、売り手として実現することになった。
- (8) 無尽蔵な労働力のもとで、自由な物流の活発化、安定的な交易の拡大は、世界に安い商品を蔓延させる。この流れは良循環として、ますます拡大し加速される。
- (9) 拡大される世界経済に対して、既存のシステムないしインフラが旧式化し、大幅に改善、増強、拡大が必要になってきている。インフレ時代には高い金利で手がつけられなかった分野に、新たに融資の道が開けることになる。

3. デフレ下の余裕資金が大規模投資を促す

- (1) デフレ下においては、「買い手」市場が形成され、熾烈な競争を余儀なくされながらも勝ち抜いた売り手の側には膨大な「余裕資金」が形成される。
- (2) 新たな時代の要請に応じて、さまざまなプロジェクトが計画されているが、その実行を可能にするのが、デフレ下の低金利である。
- (3) 現在の世界は、まさに新たな枠組みの形成、インフラ整備が進行する時代である。そこにおいて果たす日本の役割が大きくクローズアップされる時代である。
- (4) この流れを見誤ってはならない。この「デフレ」は経済的におぞましいイメージで語られることが多いが、その一方、「平和と安定」の時代は、科学技術、文化の進展などさまざまな恩恵を人類にもたらす。
- (5) それは過去の「大デフレ」の際にも実証されている。科学技術の進展、産業のイノベーション、インフラ整備が進み、その後の人類の幸福に大きく貢献しているのである。
- (6) 拡大される世界経済に対して、既存のシステムないしインフラが旧式化し、大幅に改善、増強、拡大が必要になってくる。
- (7) 一方、当然のことながら、デフレ下においては、市場での競争はこの上なく厳しい。「買い手」市場が形成され、熾烈な競争を余儀なくされ、いつまでも続く価格破壊に優勝劣敗、淘汰、整理、統合がくり返される。それと同時に、勝ち抜いた売り手の側には、膨大な「余裕資金」が形成され、その資金が、インフラ投資等に向かう。
- (8) インフレ時代には高い金利で手がつけられなかった分野に、新たな融資の道が開けるのである。

デフレ下の低金利のもとで、買い手のさまざまな欲求に応じて創意工夫、不断の努力、大胆な決断や改革への熱意を、売り手である供給側は汗と涙の連続で強いられる。

(9) デフレは買い手に天国、売り手に地獄の様相を常に呈する。

(10) ただ、この過程は悲惨な生活を人類に強いるということではない。人類の夢を叶える過程でもあって、結果としてデフレ下で高度経済成長を遂げてきたのも事実なのである。

(11) 思いもしなかった新製品、新産業が生み出され、その後の人類の生活と福祉を大いに増進させてもきたのである。

(12) この過程は、過去の「大デフレ」の際にも実証されていることである。

P128 ~ 133

<コメント>

今日我々が経験しているデフレとはどのような時代か。長谷川慶太郎先生の最新の著書から学ぶ以外、他に教えてくださる先生はいない。

— 2016年8月1日(月) 林 明夫記 —